

新疆ウイグル自治区における施設栽培による農産物輸出の現状

古澤 文

中国の経済発展と共に新疆ウイグル自治区（以下新疆）では、穀物のみならず商品作物栽培の増加など農業の生産構造は多様化している。そうした中、近年では野菜生産量が急増している。都市部を中心とした生活レベルの向上が、生鮮野菜の通年需要を増加させたことにより、冬季にも栽培可能な施設栽培が普及してきたことがその要因の一つとして考えられる。またその市場は新疆内のみならず、中国内地そして中央アジア諸国にも展開している。近年、中国が中央アジア諸国との安全保障、経済連携を強化する中、国境地域に位置する新疆での農産物輸出の現状も大きく変化してきている。本報告では当地域における農業の変容として施設栽培に着目し、生産される農産物の輸出状況に加え、輸入側の状況についても報告し、現状と課題について論じた。輸出側については新疆北西部に位置するイリカザフ自治州直轄県市における輸出用生産地域の施設栽培の事例を、そして輸入側は隣接するカザフスタン東部地域とウズベキスタン国境に近い南部地域での農産物市場、小売店への輸入野菜の販売状況に関する聞き取りをもとに報告した。本報告は2013年8月～9月、2014年8月～9月に中国、新疆ウイグル自治区イリカザフ自治州直轄県市、およびカザフスタン、アルマトゥ州のアルマトゥ市、南カザフスタン州シムケント市のバザール、農産物卸売、小売販売業者等への聞き取りなどの現地調査に基づく。

カザフスタンにおける冬季の野菜消費の内、国内生産量は3割程度であることから、新疆では輸出拡大が期待できるとして、政府は施設栽培による生産を推奨し、生産基地の整備や技術指導などを行っている。また両国間では高速道路整備、国際鉄道路線の新規開通など交通インフラ整備も進められ、今後さらなる物流量増大が予想される。カザフスタン国境に近いイリカザフ自治州直轄県市では生産基地建设のみならず、生産から簡易加工、包装、配送設備までもが整備され、こうした産地拡大の様子は衛星画像による土地利用の判読からも確認された。

一方、輸入側であるカザフスタン東部のアルマトゥ市のバザールでは現在、販売される青果物の内、春～秋季は地元産、冬季は外国産で、特に厳冬期（2～3月）の約8～9割が中

国産となっている。スーパーマーケットでも中国産が多く販売され、青果物コーナーの半分以上を占めている。中国産のほとんどは中国東部（山東省など）で生産しトラックで運ばれる。新疆産が入荷されることもあるが東部に比べその量はまだ少ない。スーパーマーケットの担当者によれば、新疆との取引は、地理的な近接性もあることから今後、積極的に行っていきたいが、適切な取引業者がまだいないということであった。一方、ウズベキスタンと隣接するカザフスタン南部のシムケント市のバザールでは、基本的に地元産あるいはウズベキスタン産が多く販売される。冬季になると中国産も出回るものの、値段はやや高めということであった。カザフスタンで中国産野菜は低価格で、見た目はきれいだが、農薬や肥料を大量に使用し、品質（味、栄養価）は低いと認識されている。しかし冬季の供給量不足を補う為に多く輸入されているのが現状である。またカザフスタンでは国内の野菜需要の高まりを受け、ヨーロッパや韓国から技術を導入し、施設栽培が広がりつつある。そうした中、まだ数は少ないが中国からの帰還者らによって中国式施設栽培（日光温室）が始められている。

カザフスタンで輸入する中国産野菜の主要な産地は東部沿岸地域で、新疆産はまだ一部に限られている。東部地域に比べ、新疆は施設栽培の後発地域で栽培経験が浅いため、中国東部の産地と比べその販路がまだ十分確保されていない。一方、シムケント市ではアルマトゥ市に比べ中国産の流入量はまだ少なく、むしろ隣接するウズベキスタン産の方が多く輸入されている。このように中国産野菜の輸入に関しては、カザフスタン国内での地域差の存在が明らかとなった。

現在、新疆では施設栽培が政府から推奨され栽培面積は増加しているが、その販路確保、拡大のためにはカザフスタンの市場、販売業者との関係構築が重要な課題といえる。またカザフスタン国内で施設栽培が増加し生産主体が多様化する中、低価格という強みだけではなく、品質面での向上を図る必要がある。一方、カザフスタンで施設栽培生産が広がる中、新疆からは農産物そのもののみならず、施設栽培技術の輸出という方向も考えられる。新疆の施設栽培における生産、技術輸出戦略の変化についても今後ほりさげて検討していきたいと考えている。

(千葉大学文学部)